漢語接尾辞「－化」の成立と展開

A study on the historical change of Sino Japanese Suffix “Ka（化）”

趙（チョウ）　麗君（レイクン）

1　はじめに

本論文は「－化」の接尾辞としての成立と変遷過程を明らかにすることを目的とする。二字漢字熟語の後部要素か独立形式かという形式の面、前接部の語彙的な面等の点から分析する。

科学書・翻訳資料・洋学資料など学術的色彩の濃い資料、新聞記事を考察対象とする。科学資料を絞った理由は、文学作品では「王化」「感化」「徳化」「教化」のような、古典語従来の用法しか見られない。「化」がものの変化を表すため、化学書・医学書など、科学書において出現しやすいのではないかと思われる。このため、蘭学資料・洋学資料の科学訳本を中心に例を網羅した。新聞記事を調査した理由は、話し言葉ではなく、硬い文章を調べたかったため、当時の用法を反映されたと思わる新聞記事を絞った。その結果、次のようなことを明らかになった。

（1）江戸中期以前の日本語と古典中国語において、「□化」は二字漢字熟語の後部要素であること。（2）中国語科学資料において、動詞「化」の用法は「化＋変化後の結果」または「手段＋化＋（対象物）」であること。（3）1774年『解体新書』から1805年『三法方典』まで、語構成が「手段＋化」の造語が見られ、「－化」が二字漢字熟語の後部要素という形を保ちながら、意味的には接尾辞化が始まったこと。（4）江戸中期、蘭学者は「－化」による造語を行ったものの、まだ体系的ではなく、古典語の「□化」形式による影響が大きいこと。（5）明治初期・中期、啓蒙書や辞書などで、「－化」が造語要素として使われ、体系的に訳語が作られており、語彙レベルで接尾辞化していること。（6）明治期1885年以降、「－化」の前接部が一字漢字の制限から解放され、二字漢字熟語の後部要素でなくなり、附属形式として接尾辞化したこと。（7）その後、前接部が三字漢字・カタカナ語・和語名詞（ただし、漢字表記）・漢語句などを取るようになって、「－化」が非和語系語彙における接尾辞として語彙的に用法を拡大したこと。（8）昭和以降、接頭辞の出現、引用や比喩の用法が出現したこと。（9）「－化」が属性の変化を表すことを明らかにし、またその展開ごとに特徴を述べる。

以上を論じ、「接尾辞化」といっても、意味・形式・語彙この三つの面によって段階があることを示す。また、現代日本語の「－化」の前接部が拡大しつつであることに少し触れたい。

2　江戸中期以前の「□化」と中国の古典語の「□化」

江戸中期以前の「□化」と中国の古典語の「□化」における「化」の用法を調べる。以下の資料から用例を網羅し、その結果の一部を【表１】にとりあげる。

江戸中期以前の「□化」

・『鎌倉遺文』（『鎌倉遺文CD―ROM版』東京大学史料纂所による）

・『吾妻鏡』『玉葉』（『吾妻鏡・玉葉データベース』吉川弘文館による）

・『日葡辞書』（土井忠生等編（1980）『日葡辞書：邦訳』岩波書店による）

・『角川古語大辞典』（中村幸彦等編（1982-1999）角川書店による）

中国の古典語の「□化」

・秦漢：『重刊宋本十三經注疏附校勘記』（十三經）『漢書』（正史）『後漢書』（正史）『史記』（正史）
魏晉南北朝：『宋書』（正史）『三國志』（正史）隋唐：『梁書』（正史）宋遼金：『新唐書』（正史）
元：『金史』（正史）明：『元史』（正史）清：『閱微草堂筆記』（筆記）『醒世姻緣』（小説）
『鏡花緣』（小說）（『漢籍電子文献資料庫』（http://hanchi.ihp.sinica.edu.tw/ihp/hanji.htm）による）

・『大漢和辞典 修訂第２版』大修館書店（以下「角」とする）

【表１】江戸中期以前の「－化」と中国の古典語の「－化」

江戸中期以前の「－化」	中国の古典語の「－化」
(1)†Vôqua. ワックァ(王化)Teiuôno ixei,goiquô.(帝王の威勢、御威光)国王の権力と権威(日葡辞書)	(1)′吾為二三公一，既不レ能二宣二揚王化一。(後漢書、張酺傳)
(2)†Fenqua.ヘンクァ(変化)国や所領などの変化。¶また、時と場所の変化に従って、計画や策略を変更すること。(日葡辞書)(ママ)	(2)′乾道変化、各正二性命一。(易、乾)
(3)一筵の千達、羽化を鳳掖之雲に得、満堂の宏才、鱗飛を竜門之浪に致す。(本朝文粋一一三)(角)	(3)′玄自後莫測所終，好道者皆謂之羽化矣。(晋書、許迈伝)
(4)三賢十地。所以開二化衆生一、前仏後仏、由レ之勧二勉三乗一(続日本紀－天平宝字四年(760)七月庚戌)	(4)′眼見年年開化新。(松平春嶽、偶成詩)
(5)孝行の次第を、毎日毎夜直にみならはせ侍らば、いつとなく、おのづから感化する心も出来なん(仮名草子・智恵鑑(1660)九・一八)	(5)′為説二道義一、以感二化之一(後漢書－陳禪)
(6)高麗より転じて、聖境に帰化せり(続紀・天平宝字二・六・二五)(角)	(6)′比縣流人、帰レ化彼レ居二万余戸。(後漢書、童恢傳)
(7)春雨五月雨は気化を以てふる雨なり(集義和書(1676頃)九)	(7)′豈獲下上附二伊顔一、楯共頼二気化。(顔延之、重釈二何衡陽達性論一)
(8)解レ惑則人心疑惑悉消化(藤樹文集－感悟)	(8)′使下百姓熹熹中遷二於善一、邪僞之心、嗜慾之性、潛以消化、而不上レ知三其所二以然一、此之所謂レ化也。(周書、蘇綽傳)
(9)淳化同二、姫旦一、聖道亜二仲尼一(本朝続文粋一一・参案楽寺詩〈大江匡房〉)	(9)′時播二百穀一、草木淳化(史記 - 五帝本記)
(10)土俗万差にして造化はかりがたし(正法眼蔵(1231－53)袈裟功徳)	(10)′昔老聃之徂レ西也、顧而告レ予曰、云云、造化之所レ始、陰陽之所レ変者、謂二之生一謂二之死一。(列子、周穆王)
(11)敵によって、てんくわす、と、いふ事あり、かやうのしろを、手たてをかへて、おとすものなり(仮名草子・大坂物語(古活字版第一種)(1615頃))	(11)′変動無レ常、因レ敵転化、不レ為二事先一、動而輒随、故能圖二制無疆一、扶二成天威一。(三略、上略)
(12)誠是、明知艱難之亡身、然猶、忘命徳化之遠及者也(性霊集一五(835頃)為大使与福州観察史書)	(12)′舜其信仁乎、乃躬耕處レ苦而民従レ之、故曰、聖人之徳化乎。(韓非子、難一)
(13)すべて此物語は風化を本としてかける(源氏外伝・序)(角)	(13)′故陳二后稷先公風一化之所一レ由。(詩、豳風、七月序)
(14)女心傷悲は、春は女悲、秋は男悲といへり。天地の物化に感ずる也(集義和書(1676頃)一六)	(14)′昔物、荘周夢爲二胡蝶一、栩栩然胡蝶也、自喩適レ志輿、不レ知レ周也、俄然覚、則蘧蘧然周也、不レ知周之夢爲二胡蝶一、則必有レ分矣、此之謂二物化一。(荘子、齋物論)
(15)経二回祿一而鎔化(宝覚真空禅師録(1346)坤・西禅寺鋳鐘勧進疏)	(15)′銀銅相雜、亦易二鎔化一。(物類相感志)
(16)春と云と〈略〉百千鳥を囀せ霞を棚引せ氷雪を融化する(雑話筆記(1719－61)上)	(16)′緬想融化初、元気下磅薄(朱德潤 - 黒谷東路山詩)

以上【表１】は江戸中期以前の「□化」と中国の古典語の「□化」の例である。これらの例に使用された「化」を意味によって大きく次のように分けることができる。

(1)「化」が人の思想変化を表す。例えば「王化」は「王の教化」の意味である。類例は「感化」「帰化」「徳化」「風化」などがある。

(2)「化」が「自然が萬物を育成する力」の意味を表す。例えば「造化」は「天地自然の理」を言う。類例は「淳化」（自然に発育すること）などが挙げられる。

(3)「化」が「変化」の意味を表す。例えば「消化」は「(物が）消滅し、なくなる」の意味である。

類例は「鎔化」「融化」などがある。

(4) または「□化」全体で一つの意味を表す用法もある。例えば「羽化」「遷化」が「人の死」を表す。

以上で示したとおり、江戸中期以前の「□化」と中国の古典語の「□化」の意味がほぼ同じであることが分かる。「化」が二字漢字熟語の後部要素として使われたことが分かる。

3　中国語科学書・科学訳本における「化」の用法

蘭学資料の「－化」の用法を確認する前、中国に「化」の接尾辞用法があったかどうかを検討する必要があると思われる。

まず中国の科学書にある動詞「化」を調査する。科学書とは、中国の科学者が書いた数学、医学、農学などの分野の著書を言う。これを対象とする理由は、蘭学資料の「－化」の用法は中国の科学資料に影響されたかどうかを確認するためである。

中国語科学書の用例出典は以下の通りである。

・『葬書』『水經注』『金樓子』『備急千金要方』『九章算術』『蘇沈良方』『夢溪筆談』『稼村類藁』『医方大成論』『農政全書』『本草綱目』（『文淵閣四庫全書』電子版による）

・『宋氏燕閒部』『墨娥小録』『琉璃誌』『火戲略』（『中国科学技術典籍通匯』化学巻　河南教育出版社による）

・『物理小識』（早稲田大学図書館―古典籍総合データベースによる）

なお、『金樓子』の用例の句読点は『中國哲學書電子化計劃』（http://ctext.org/zh）を参照したものであり、ほかの用例の句読点は筆者が付けたものである。

【表２】中国語科学書における「化」の中国語用法

年代	書名	著書	分野	後掲（ア）	後掲（イ）
晋	葬書	郭璞	術數類、相宅相墓之屬	(1)乾,父之精。坤,母之血。二氣感合,則精化為骨,血化為肉。	
魏	水經注	未詳	地理類、河渠之屬	(2)長老傳言夷昔牧此,一朝化為石迄。今夷人不敢往牧貪水出焉。（水經注、巻三十六）	
梁	金樓子	孝元皇帝	雜家類、雜學之屬	(3)初，禹娶塗山氏之女，生啟，三年禮畢，益避啟，人不歸益而歸啟。一名建，一名餘，母化而為石。啟即位，伐有扈氏，啟庶兄也。夏禹氏絕，少康出於竇之中，複禹跡也。（巻一）(4)昔孔子夢三槐間豐沛邦有赤蛇，化為黃玉，上有文曰「卯金刀」字，此其瑞矣。（巻一）(5)若謂受氣者皆有一定，則雉有化蜃，雀之為蛤，壞蟲仮翼，川蛙奮蜚，鼠化為鴽，草死為螢，人化為虎，蛇化為龍，其不然乎？（巻五）	
唐	備急千金要方	未詳	醫家類	(6)蚯蚓安蕙葉中,用麸封頭蒸令熟。並化為水,以汁滴入耳中,滿即止。（巻二十）(7)即化為黃水而出。（巻二十）(8)此熱傷肺,肺化為血不治。（巻五十四）(9) 精化爲氣,氣傷於味。（巻七十九）	
唐	九章算術	未詳	天文算法類、算書之屬	(10)實得二十八。而分子化為法矣。（巻八）	
宋	蘇沈良方	沈括	醫家類	(11)生姜酒磨,化再湯令極熱。（巻四）(12)回後得此方,服之。蟲悉化為水。（巻六）(13)凡折傷用一丸入少油,火上化開,塗傷痛處。（巻七）	(14)再以酒一合煎化,温啜。若得逆便吐。（巻七）
宋	夢溪筆談	沈括	醫家類	(15)凡百莖根幹相連,悉化為石。（巻二十一）(16)物蓋蛇蜃,所化如石蟹之類。（巻二十一）(17)熬膽礬鐵釜久之,亦化為銅水。（巻二十五）	
元	稼村類藁	王義山	別集類	(18)緣何扁鵲號良醫,傳法元來飲,上池化作月湖。（巻三）	
元	医方大成論	孫允賢	医学	(19) 三等之痳皆出於足,太陽寒水之經。外爲大寒,内爲二火交攻,化血肉爲膿寒。	(20)霍亂之證,多兼乎吐瀉,皆由飲食不節或過(歹食)肫膾乳酪之物,傷于五藏停積胃脘脾弱不能運化。

明	農政全書	徐光啟	農家類	(21)曰田有良薄,土有肥磽,耕農之事糞壤為急。糞壤者,所以爨薄田為良田,化磽土為肥土也。(卷七)(22)用新汲水化開,淨刷牙蘸水遍刷過候乾則蚊蠅自不作穢。(卷四十二)	(23)謂之蠟渣,過白露則粘住難刮矣。其渣煉化濾淨或甑中蒸化,瀝下器中待凝成塊即為蠟也。(卷三十八)
明(1504)	宋氏燕閒部	宋詡	雑学	(24)麝香一銭,軽粉一半銭,又以薬汁半合研濾。将餘薬水入黄明膠一両二分同熬,不住搅,令化醒。(25)用白禄紙百幅,牛膠半斤,明礬入銭湯化醒之。(26)(少顔膏)黄檗皮二寸半,土瓜根三寸,俱為細末同肥(束束上下)子七枚擣為膏晨起化湯(奔頁)面,大去面皺	
明(1571)	墨娥小録	未詳	雑学	(27)玉可以烏米酒及地榆酒,化之為水。(28)大抵小様白篠紙一百幅約,用明淨撫膠半觔温湯化開,如水之清。(29)用井花水調泥礬浸一周時,再烘熱。銅器上三度作脚色,候乾,却将硇砂以水浸化淨。(30)白錫細削投水銀中,良久,錫自軟爛,化成泥。乃以津液染揩擦塗銅器,以白爲度,恐過多。	
明(1578)	本草綱目	李時珍	醫家類	(31)又蚰蜒入耳灌之即化成水。(卷五十上)(32)男化為女,宫刑濫也。女化為男,婦政行也。(卷五十二)(33)抑譚子所謂：至嫣者,化為婦人。至暴者,化為猛虎。心之所爨不得不爨。(卷五十二)	(34)運化腹中瘀血,殺勞蟲疳蟲。(卷九)
清(1664)	物理小識	方以智	雑学	(35)呵气属火,而化為气水。(36)毒為砒,凝色而為丹青,化液而為礬汞。(37)至于男化女,女化男,且兼二体。	
清(1665)	琉璃誌	孫廷銓	琉璃の作法	(38)火得紅徐性和矣。精未融也。火得青徐精融矣。合同而化矣。	
清(1753)	火戲略	趙学敏	花火・火薬の作法	(39)能消柔五金,化七十二石為水。故名硝硝消也。(40)欲化為水,用以竹筒盛硫末,埋馬糞中,一月即成硫黄液。	

次に中国の科学訳本にある動詞「化」を調査する。中国の科学訳本とは、宣教師が口述し、中国人が執筆した数学、医学、農学などの分野の訳本を言う。これを対象とする理由は、蘭学資料の「－化」の用法は中国の訳本によって影響があったかどうかを確認するためである。

中国科学訳本の用例出典は以下の通りである。

・『幾何原本』『泰西水法』『職方外紀』『空際格致』

（早稲田大学図書館―古典籍総合データベースによる）

・『植物学』　（『江戸科学古典叢書』24　恒和出版1980による）

・『西医略論』『婦嬰新説卷』『内科新説』

（長崎大学附属図書館―近代化黎明期翻訳本全文画像データベースによる）

【表３】中国語科学訳本における「－化」の中国語用法

出版年	書名	国籍	分野	後掲（ア）	後掲（イ）
1607	幾何原本	イタリア	数学	(1)自有而分。不免為有若減之可盡是有化為無也有化為無猶可言也。	
1612	泰西水法	ドイツ	水利科学		(2)如人一身全頼四行會合所生會合所成身中温煖蒸化食飲令成血気
1623	職方外紀	イタリア	地理	(3)一国其地有一湖挿木于内入土一段化為鍈水中一段化為石出水面方為原木也 (4)至一石穴見石人無筭皆昔時避乱之民穴居於此死後為寒気所凝漸化為石	(5)喜食人肉西土常言其地缺三字王法文是也今已稍稍帰化頗称人理 (6)且士大夫抱雅志将以周遊四遠或為采風問俗以弘教化或為搜珍覓寶以充美観 (7)然而非虚皆實夫造物主之神化無量 (8)昔神皇盛際聖化翔洽無遠弗寶吾友利氏齎進万国圏誌己 (9)但陋俗最多近天主教中士人（彳生）彼勧化教之
1605～1640	空際格致	イタリア	地理学	(10)蝃蝀為雨兆、蓋雲必潤而将化雨。方可成虹。(11)気之乾。犹可凝結不流。雷值衆液。不能透入其中。而化乾之。(12)又雲太遠日者不能受充。又太近日者、未免化散。惟遠近得中。方能成之。(13)二蝃蝀又為晴兆。蓋雲之厚。而。且。結。者。未。能。成。虹。則。必。降。大雨。若成霓之雲。薄于前而厚于後。己化。散。為。微。雨。矣。化既尽。天必将晴。因知霓雖指雨。必不能大且久也。(14)潤雲正在中域、或為本域之冷寒所逼。不能化水。乃結成雪。(15)清者仍化水成雨。其濁者不能化水。乃落而成霧。(16)此象月下多而日下少者。因日光之力原大。化散其気不使結成圏矣。(17)又説、几見日多者、必為雨来之兆、蓋湿気衆也、若偽日在真日之南。其雨更多。因南方之雲。尤湿而易化為雨。故。(18)若厚密者、多含潤沢。故易化雨。(19)又風消長之規不一、日出時及柳発風。因。日。照。煖。気。而。使。之。動。若无（ママ）有風。而日漸化其気。又能致風息。	(20)夏時泉川乏水者、因天甚向亢炎地、甚燥乾、乃日所招之気、又甚寡且清、最易消化而不足結雲変水也。(21)又説曰、惟日升降時、則致多日之像、若在項則難得成、蓋日在頂。直射其暈于地。即遇。潤。雲。必。晞。化。之。難以久存。而成是像也。(22)又日落時風有長息者気。己。失。日。照。故弱又。因。無。日晞。化。其。気。乗。旺。

1664	物理小識	中国	雑学	(23)呵气属火而化為气水（24)毒為砒。凝色而為丹青。化液而為礬汞（25)至于男化女女化男。且兼二体。	(26)徳化之水。鄜延之川。日夜脂流。煮鉄為銅。
1702	医方大成論	中国	医学	(27)三等之痼皆出於足太陽寒水之經外爲大寒内爲二火交攻化血肉爲膿寒	(28)所謂脉證治因不過以五行之造化合一身之理得其理（29)今人患痢者、古方謂之滞下是也。得病之由、多因脾胃不和、飲食過度停積于腸胃之間不得尅化而又為風寒暑濕之（30)霍亂之證多兼乎吐瀉皆由飲食不節或過（歹食）胞膾乳酪之物傷于五藏停積胃脘脾弱不能運化又為風寒之氣所干
1753	火戯略	中国	火薬の作法	(31)能消柔五金化七十二石為水故名硝硝消也（32)欲化為水用以竹筒盛硫末埋馬糞中一月即成硫黄液	
1857	全体新論	イギリス	医学	(33)乃由右房過肺、化爲赤血、返心左房、運養身體（34)精珠始生、暮年月信止、精珠化爲鳥（35)藥物必先入胃、有色化為無色、有味化為無味	(36)可見造化之主、本源無二。(37)可将鳥内玻璃罐中、密緘罐口、初見呼吸如常、繼見味呿頻數、氧氣吸盡、(羽奄)然羽化矣（38)漸能擦去鋒稜、故胚中常存沙粒、以爲擦化食物之本也。(39)人身百體、脂液甚多、有用者留以養身無用者化出於外如口津以軟潤食物、胃津消化食物膽汁搾化食物（40)炭氣者、乃身體無用之物、雑化爲氣相合、其性有毒（41)血頓更改而運行、造化之工妙如此（42)胃津、放于器内以火煖炙如胃本熱、内以麺飯而匀轉之、漸化為膏油、変膏油之後、甚爲難化
1858	植物学	イギリス	植物学	(43)瓣俱相掩疊末一瓣半化作鬚在内者不落在外者落間或有相連者鬚恒生於心輪在瓣之上（44)何以能令子中之胚乳化糖以養苗	(45)細思之、自不能不確然知有造化主矣
1858	西医略論	イギリス	医学		(46)湯火傷一証、世間最多（略)曰鎔化五金、曰竹木煤炭硝磺火藥、皆足以傷人（47)可知呼吸舒縮、皆造化主所爲也（48)若有灰塵外入之物、用醋水澆入銷化之。若沙子等物在、則以両指牽上下眼胞、水澆之、自出。
1859	婦嬰新説	イギリス	医学		(49)夫乳者、造-化-主昇-予産母、養育嬰兒者也
1859	内科新説	イギリス	医学	(50)所化之物、化爲風氣	

3.1 「化」用例の二分類

用例は「化」と前後の関係によって大きくア）・イ）に二分類できる。

ア）「化」＋変化後の結果

「化」一字で動詞「変化」の意味をする場合、「化」の後に変化後の結果を伴う。つまり「化＋（助詞）＋結果＋（対象物）」の構造で、「変化し、その結果が○○になる」の意味を表す。「化」と「結果」の間、「為」「成」「作」のような助詞で繋がる場合もある。例えば【表２】の例（1）と例（2）は次のように考えられる。

「血化為肉」＝「S（血）＋V（化）＋助詞＋C（肉）」

「化為石」＝「V（化）＋助詞＋C（石）」

類例は「化成泥」（『墨娥小録』）、「化水」（『空際格致』）等が挙げられる。

また、使役文の場合動詞「化＋対象物＋（助詞）＋結果」の語順になる。例えば【表２】の例（39）

「化七十二石為水」＝「V（化）＋O（七十二石）＋助詞＋C（水）」

「化」のあとに「結果」が付くという語順は変わりがない。この点に関して、中国の科学書の用例【表２】と中国の科学訳本の用例【表３】において、用例の相違点が見当たらない。

イ）手段＋「化」＋（対象物）

「化」の前接部分は「手段」を表す。「手段」とは、変化を成立させるため、行われた動作や行為を表す。例えば次の二例がある。

「蒸化」＝「手段（蒸）＋V（化）」

「搾化食物」＝「手段（搾）＋V（化）＋O（食物）」

【表２】の例（23）「蒸化」は「（蠟渣を）蒸すことによって変わる（溶ける）」の意味である。また「手段＋化」の後ろに「対象物」を伴う場合もある。例えば【表３】の例（39）の「搾化食物」は「（膽汁が）食べ物を搾ることで変わらせる」の意味を表す。この類の類例は「煎化」（『蘇沈良方』）、「運化」（『医方大成論』）、「擦化」（『全体新論』）などがある。「蒸」「搾」「煎」「運」「擦」はいずれも動作性を持つ語である。その理由で中国の科学資料の「手段＋化」は「～をすること　デ/ニヨッテ　～変化が生じる」の意味を表すことが分かる。

イ）について、【表２】では「手段＋化」の場合、対象物が必須ではない（例えば【表２】の例（14）「煎化」）。しかし、【表３】の訳本において「手段＋化」の場合、対象物を伴う例がある（例えば【表３】の例（2）「蒸化食飲」）。これは中国語科学書と中国語科学訳本の相違点と思われる。

3.2 「手段＋化」の分野

「手段＋化」の用法がみられる資料の分野についてみる。『泰西水法』は水利科学だが、【表３】例（2）の通り、水利科学を人の消化にたとえ、説明したものであるため、この例（2）はやはり医学の内容である。残りの『蘇沈良方』『医方大成論』『本草綱目』『西医略論』『全体新論』が医学、『農政全書』が農学に属する。このように、「手段＋化」の用法は医学・農学にのみ見られることが言えると思われる。

以上のことから、中国語の科学資料において「化」は動詞「変化」の意味を表すとき、「化」の後に変化後の結果（ア）を伴う。または「化」の前に変化させる手段（イ）を伴う。手段（イ）を伴う場合、医学または農学の分野に用例が多く見られる。「手段＋化」の後、中国語科学書の場合、「対象物」が伴わないが、中国語科学訳本の場合、「対象物」を伴う例がある。

4　江戸中期・蘭学者の訳本における「－化」の用法

はじめのところに既に述べたように、江戸中期「化」の用法を確認するため、蘭学の訳本に焦点を絞った。また、蘭学訳本と言っても、語学を始め、天文学、数学、物理学、医学、化学など、多くの分野に見られる。用例を確認したところ、全分野の中で、「化」が物の変化の意味を表す分野、つまり化学や医学の分野に最も多く使用されたことが分かった。以下は医学、化学訳本を中心に用例を集めた。用いた資料は具体的に以下の通りである。

・『遠西観象図説』『解体新書』『管蠡秘言』『求力法論』『西洋画談』『形影夜話』『和蘭通舶』
『蘭学階梯』『蘭訳梯航』『ラランデ暦書管見』『和蘭医事問答』『和蘭天説』
（『日本思想大系　洋学』（上・下）岩波書店1976による）

・『遠西奇器述（第二輯）』『鼓銅図録』『泰西七金訳説』『鉄煩鋳鑑図』『量地指南』『植学啓原』
『三法方典』『製造并奇方録』『硝石篇』『硝石製煉法』『黴瘡秘録標記（坤）』
（『江戸科学古典叢書』恒和出版1976による）

・『泰西輿地図説』『西説医範提綱』（『蘭学資料叢書』青史社1981による）

・『機織彙編』『舎密開宗』『蘭説弁惑』

（国立国会図書館―電子展示会「江戸時代の日蘭交流」による）

以上の資料から網羅した「－化」の用例は次の【表４】にまとめる。

【表４】江戸中期・蘭学者の訳本における「－化」の用例

出版年	書名	分野	用例
1733	量地指南	測量術	用例ナシ
1734	町見弁疑	測量術	用例ナシ
1774	解体新書	医学	(1)奇縷管は奇縷をして上転して左の欠盆骨下の血脈に至さしめ、その血と淆化し、以てその血を盛んにし、心に帰養することを主る。(2)その主る所は、能く血を順にし、呼吸を進退し、兼て腸胃の運化を佐く。(3)則ち造化の大なりとは雖も、あに奇ならずや。
1777	管蠡秘言	外国風俗	(4)けだしその教化の至る所、実に遠大となすなり。(5)語に云く、礼失して野に求むと。あにかの諸邦故有と以為へる者、三代の遺化ならざることを知らんや
1782	蘭学階梯	語学	(6)昭平百年、治化の盛んなる、官、象胥を設け、以て四方の善を択ぶも、また未だその書を得ず。
1782	蘭訳梯航	語学	(7)壺鉼ニ作リ、物ヲ貯ヘ、固封スルトキハ、久キニ耐ヘテ其本性ヲ存シ、諸薬品ノ風化スベキ、香気アルモノニテも、能ク久遠ニ伝フベシ。(8)吾輩、其余化ヲ仰ギテ、敬服スベキコト共ナリ。
1784	求力法論	天文物理数学	用例ナシ
1789	泰西輿地図説	地理	(9)然ルニ後来皆一王ノ政治ニ服化スルニ及デ其牆壁ヲモ毀チ崩セリ然レドモ今尚其封彊ノアト残リテ服化 (10)大国ト同ク並ベ称セラレマノ所以ハ其国中商化便用ノ地ニシテ
1795	和蘭医事問答	医学	(11)乃ち二先生の天の寵霊に答へて聖化の万一を補ふ所以の者
1796	和蘭天説	天文学	(12)金星ト此地及月・火星ハ造化ノ巧ヲナシ、土木ノ二星必ズ人類ヲ不レ為、日光ノ力不レ及、･･･及層々タル衆星皆氷玉ニシテ、僅此二星・月此地ノ如ク造化ヲナスナリ。
1799	蘭説弁惑	蘭学総論	(13)昭代の運、八蛮来聘し、四夷化に帰して貢くところのたから、百家のふみ、あげてかぞへつくすべからず
1799	西洋画談	画論	(14)画も亦同理、西画は、只能造化の意をとるのみ。(造化：天地自然の理)
1801	鼓銅図録	冶金	(15)鎔化して鈸を取る図 (20)既-鎔 - 化
1802	形影夜話	医学	(16)一曰刀化。俎砧宰割。二曰火化。烹煮熟爛。三曰口化。細嚼緩嚥。四曰胃化。先づ三化すべしとなり。曰凡人飲食蓋有四化。(17)飲食剋化することを得ず、化物も運施の道を失す。
1803	ラランデ暦書管見	天文学	用例ナシ
1805	和蘭通舶	地理学	(18)羅瑪（ローマ）ノ帝ハ世代婦ヲ娶ラズ。欧羅巴（ヨウロツハ）諸国ヨリ、教化ヲ修スル者相集リ、其門ニ学ブ。
1805	西説医範提綱	医学	(19) 故ニ其精詳ナル造化ノ秘□ヲ探リ。(20)方今治化隆盛余澤ノ及ブ所。(21) 運化活動ヲ司リ。人の強弱盛衰ノ由テ出ル所ナレバ。凡メ病毒体二著ケバ。(22)能ク物ニ滲透シテ烊解融化シ。(23)又飽食充満スレバ性力劣弱ナル肝ノ胆液ニテハ尽ク克化スル亅能ハズ。(24)酸稀ニシテ能クニ浸透シ融解溶化シテ醸熟ヲ作ス故ニ能ク水殻ヲ化シテ乳糜トナラシム。
1805	三法方典	製薬	(25)根質ノ揮発スベキモノハ風化シテ気味ヲ脱セン (26)膠痰粘液ヲ滇化メ大小便ヨリ駆除スルノ功アリ (27)顆状ニメ色白キヲ撰用スベク且水ニ投シテ悉鮮化スルモノヲ鑒スベシ (28)鮮化白銀 (29)気ヲ去ル寸ハ塩トナル仍是ヲ純浄ナラ使ン」ヲ要セハ再水ヲ以テ爛化シ淋漉シテ水気ヲ去ベシ (30)人体の温暖何ゾ之ヲ鎔化スル (31)其状金沫ト為ルモノ是ナリ金沫其焼化ノ精粗ニ因テ色ヲ変ス (32)長圓ニ種アリ両根共ニ味辛辣ニメ舌ヲ焼ガ如シ性熱胃化ヲ強クシテ悪心ヲ休メ (33)胃家及子宮ノ運化ヲ強クシ又腎膀胱ノ諸病症ヲ療スルニ名声アリ (34)右ニ膠ヲ投シ女火ヲ用テ煮化シ薫発シテ水気ヲ減シ濃舍利別ノ如クナルヲ度トシ
1808	黴瘡秘録標記坤	製薬	(35)鉛ヲ火上ニテ溶化シソノ上ヘ硫黄ヲスコシフルカケテ溶ケ終ル (36)用二火一ヲ鎔 - 化俟三テ青煙起白煙来リ
1822	製造并奇方録	製薬	(37)猛烈ノ反勢ヲ折キ自余ノ烟気化ソ第三罎中 (38)赤色烟気水銀悉溶化至如稀水上火即水気熱散
1823	遠西観象図説	天文学	(39)「易ヲ学ブニ非ズバ、造化ノ妙ヲ究ルコト能ハザルベシ」ト云へり。
1830	機織彙編	絹織の技術書	用例ナシ
1833	植学啓原	植物学	(40)皆一-種子ノ之所ニカヘル孵 - 化 (41)温者用同 - 量。而溶 - 化水亦能溶之。(42)水中之酸 - 化金屬。(43)或有酸化銲有酸化満俺。(44)三曰炭 - 化色分。(45)蜂啖花之葯粉。胃化既畢乃遣之以造窩烊 - 化之。乃成蜜蠟。蠟輕於水重焼-酒烊 - 化于百-四-十度之温。(46)有多足長身之紅蟲。卵孵而未羽化者而已。(47)可以賛造 - 化之妙也 (48)硫化
1834	遠西医方名物考補遺	薬学	(49)この薬半刃ヲ薄荷水六弓ニ溶化シ (50)燥癧等ヲ軟化シ或ハ消散和軟化疏散ノ崚薬トス (51)清潔浄白ノ鹿角屑ヲ取リ清楚ノ磁鍋ニ内レ水適宜ヲ加、煮テ軟化スルヲ候ヒ濾テ (52)再餾焼酒ニ浸セハ其質融化シ出ル亅最多シ。(53)大気ニ彌漫シ萬物二充貫メ温暖ヲ賦与シ凝體ヲ融解シ流体ヲ気化ス。(54)気類ヲ自持メ氤氳布化スル者亦温素ノ張力ニ非ルハナシ故ニ造化ノ諸物。温素ノ多少ニ随テ凝體気類ノ三種 (55)大気運動シ地中ノ元温揮発シ廃物生化ノ機熄サレハナリ (56)瀘く多クメ輿質風化ス (57)諸物酸素ト抱合スレハ酸性ニナリ酸味ヲ生ス。然ルニ多ク酸素ヲ帯テ酸味ナキ者アリ是ヲ酸化物ト曰フ
1837	舎密開宗	化学	(58)玻璃ハ其和剤ノ分量ト燦化ノ火度ニ従
1852	鉄煩鋳鑑図	冶金	(59)鉱中ノ鉄酸化ヲシテ金属ノ本状色ヲ云フニ復スルナリ (60)理ヲ究メ、遠ク造化ノ淵源ヲ探索シ
1854	泰西七金訳説	冶金	(61)王水ハ金ヲ解化スル液汁ナリ (62)鎔化銅并眞鍮且為軟柔法 (63)煉熟全体シテ或ハ煆化シ或ハ未トナシテ他ノ諸品ノ中ニ交和スル
1854	硝石篇	鉱業	(64)毎月風化石灰少許ヲ此上ニ撒ス (65)又他ノ草木質ノ腐化シタル瘠土ヲ調和シ搗キ固ム (66)水五分ニ溶化スル者トス其後モ時々尚冷水少許ヲ加フベシ (67)温湯少許ヲ滴加シ融化スレバ二三「之ニュート」ノ後（略）(68)而シテ火ニハ燦化シ易シ之ヲ火ニ烊シテ後冷定シ (69)食塩ヲ含ム者ハ此酸化銀

1854	遠西奇器述	西洋近代技術	(70)食塩水ハ硝子壜ニ（食留）水ヲ盛り食塩ヲ放下シヨク振湯シテ己ニ溶化セザルニ至リ
1854	硝石製造弁	鉱業	(71)時珎造化生物の妙をことごとく知りがたし
1859	遠西奇器述二	技術工学	(72)此両金ヲ黄金溶液ニ沈ムレバ。水化電気ノ為ニ。黄金分カレテ鍍スベキ物上ニ降著シ此業全ク成ル。
1863	硝石製煉法	鉱業	(73)金を銷化す料（レウ）に用ると…

4.1　造語の出現

江戸中期、蘭学者の訳本に造語が出現した。中国や日本の古典語と中国の科学資料に見られない江戸中期蘭学者の訳本に新しく出現した「□化」の例を造語とする。

造語であるかどうかを判断するには、中国の史書13冊、日本の古典資料4冊、中国科学著書16冊、中国科学訳本９冊を参考する。以上の資料にないものを『大漢和辞典』『角川古語大辞典』『日本国語大辞典』この三冊の辞書で確認する。資料と辞書に全部見られない用例を「造語」とする。

以上の調査範囲で、最も早い造語は1774年の『解体新書』にある「淆化」（【表４】の例（1））である。その他、造語と思われる例は以下の通りである。

1802年「刀化」「口化」「三化」「四化」「胃化」（『形影夜話』）

1805年「滚化」「鮮化」「爛化」「焼化」「煮化」（『三法方典』）

1833年「酸化」「炭化」「烊化」（『植学啓原』）

1834年「軟化」「生化」（『遠西医方名物考補遺』）

1854年「腐化」「爍化」（『硝石篇』）

1854年「煆化」（『泰西七金訳説』）

4.2　造語の分野

造語が見られる分野は「医学」「植物学」「製薬」「化学」「冶金」「鉱業」である。これらの分野は物の品質や内部構成の変化が生じる分野である。逆に、「測量学」「外国風俗」「語学」「天文」「物理学」「数学」「地理」「画論」「（絹織物生産の）技術書」のような、物の品質や内部構成の変化が生じない学問では「化」の造語が見当たらない。つまり、蘭学の造語が医学、製薬のようなものの内部成分変化が生じる分野から始まったといえる。

4.3　造語の語構成

蘭学訳本において、造語の構成要素は中国の科学資料と同じ、「手段」と「変化後の結果」この二種類がある。

① 手段＋化

「化」の前に「手段」を付ける用法がある。「手段」と思われる例は以下のものがある。

「淆化」『解体新書』　　「刀化」「口化」「胃化」『形影夜話』

「焼化」「煮化」『形影夜話』　「烊-化之」『植学啓原』）[1]

手段を動詞と名詞に分けられる。手段が名詞である場合、「刀化」「口化」「胃化」が挙げられる。例えば「刀化」（【表４】例（16））は「（食材を）刀ニヨッテ変化サセル」の意味である。手段が動詞である場合、「淆化」「焼化」「煮化」「烊化」がある。例えば「淆化」（【表４】例（1））は、「（血ガ）淆（混じること）ニヨッテ、変化スル」の意味である。

既に述べたように、中国の科学資料には「手段＋化（+対象物）」の用法がある。実際の調査に当たって、中国の古典語にも「手段＋化」の用法がある。例えば次の例「火化」がある。

（1）昔者先生、云云、未レ有二火化一、食二草木之寶、鳥獸之肉一、飲二其血一、茹二其毛一。（礼、礼運）

「火化」は「火で烹て生物を熟食とすること」の意味である。【表４】の例（16）の「火化」が中国の古典語の「火化」と同じ意味である。この「火化」と同じ語構成の造語は「刀化」「口化」「胃化」がある。

蘭学の造語は「手段＋化」の語構成である場合、「化」の後に対象物を伴わない。この点は中国の古典語と中国の科学著書と同じである。このことで、蘭学の造語は中国の古典語または科学著書の影響を受けたと言えるだろう。蘭学者は中国の古典語と中国の科学書に既存する語構成に従って、新しい造語を行ったと考えられる。

②　変化後の結果＋化＋（対象物）

造語のもう一つの語構成は「変化後の結果＋化」である。例えば以下の例がある。

1805年『三法方典』「爛化」　1833年『植学啓原』「炭-化」

1854年『泰西七金訳説』「煆化」　1854年『硝石篇』「腐化」「爍化」

「化」の後に変化の対象を伴う場合もある。例えば下記はその例である。

1805年『三法方典』「鮮化白銀」　1833年『植学啓原』「酸化金屬」「酸化銕」「酸化満俺」

「変化後の結果」がある場合、中国の科学資料では「化＋変化後の結果」の構造である（例えば【表２】例（2）「化為石」）。蘭学者の造語において、従来の中国資料の語順と逆になり、「変化後の結果＋化」構造の造語が見られる。つまりこのタイプの造語が従来中国の文法からの影響を受けなくなり、日本語の文法に適切の語順―「結果＋動詞」―になった。「変化後の結果＋化」の造語の出現が「－化」の意味的接尾辞化の証拠であると考えられる。

江戸中期において、「－化」は意味的に接尾辞化が始まっていたと思われる。しかしすべての造語が二字漢字熟語という制限から解除されていなかった。

4.4　古典語の意味変化

蘭学資料に造語が出現したほか、古典語の意味変化も見られる。古典語の意味変化とは、中国の古

[1]　烊-化について、『植学啓原』に「－」記号が多く見られる。「－」は一語であることを示す役割である。また、「烊」は「とろかす。金属をとろかす」の意味である。

典語にある語形だが、蘭学資料に新しい意味で使われるものを言う。例えば次の例がある。

1805年『三法方典』「風化」　1822年『製造并奇方録』「気化」

「風化」は江戸中期以前や中国の古典語で下記例（2）のように「良い教えで人を善に導く」（修訂『大漢和辞典』による）の意味を表す。

（2）故陳二后稷先公風－化之所一レ由。（詩、豳風、七月序）

蘭学者の訳本では【表４】例（25）のように、「風ニヨッテ変化スル」の意味で使われた。つまり「手段＋化」の構造である。

また、「気化」について、古典語で下記（3）のように、「陰陽の気の変化」の意味を表す。

（3）豈獲下上附二伊顔一、楢共頼中気化。（顔延之、重釈二何衡陽達性論一）

蘭学者の訳本では【表４】例（37）のように、「気体ニ変化スル」の意味を表す。「結果＋化」の構造になったと思われる。

「風化」「気化」この二例は、中国の古典語にある語形だが、しかし、語構成と意味は古典語と異なる。このため、蘭学者の造語ではないかという考えもあり得る。しかし、蘭学者は漢文に詳しいだけでなく、当時できる限り中国の古典語に出典がある語を使うという姿勢もあった。また、前節では蘭学の造語の語構成を分析した結果、蘭学者が中国の古典語や科学著書の語構成に従って、造語を行ったことが分かった。

以上の要素を考えると、「風化」「気化」は蘭学者によって新しい意味で使われたと思われる。

4.5　物事の物理的な性質・状態

この節では「－化」の前接部の意味から分析してみる。

「酸化」を例に見てみよう。【表４】の例（57）は「酸化物」の説明文に当たる。この説明によると、「酸化」は「（酸素と抱合することによって）酸性になる」の意味である。また、「軟化」について、（『遠西医方名物考補遺』【表４】例（51））では、「鹿角屑を煮て、柔らかい状態（軟）ニナル（化）まで待つ」との意味である。

「酸」「軟」は、化学性質、物理性質という属性を表す。したがって、「酸化」「軟化」はその属性に変化するという意味になる。「変化後の結果＋化」類の造語は属性の変化を表すという結論を得ることができる。

5　明治初期から明治中期における「－化」の用法―社会思想資料・辞書を中心に―

1860年代、哲学など人文科学の訳本も見られるようになった。「－化」が人文科学という新しい分野にどのように用いられているかを調査する。西周・福沢諭吉の訳本や著書、『哲学字彙』などの辞書にある「－化」の例を調査した。

辞書類

・『生物学語彙』岩川友太郎（国立国会図書館近代デジタルライブラリーによる）

・『改訂増補　哲学字彙』（1884）井上哲次郎著、有賀長雄増補　（1980年復刻版　名著普及会による）

西周の諸著作

・『性法略』『致知啓蒙』『百一新論』『心理学』『利学』『仏国収税法』『心理学』

（国立国会図書館による）

・『生性発蘊』『復某氏書』（大久保利謙（1981）『西周全集』宗高書房による）

福沢諭吉の諸著作

・『学問のすすめ』『学者安心論』『学問之独立』『日本男子論』『女大学評論』

『新女大学』『人生の楽事』『肉食之説』『養生の心得』『アメリカ独立宣言』

『家庭習慣の教えを論ず』　（『福澤諭吉全集』岩波書店（1970）による）

・『旧藩情』　（『明治十年丁丑公論・瘠我慢の説』講談社学術文庫1985による）

・『京都学校の記』『成学即身』『学校の説』『慶応義塾学生諸氏に告ぐ』

（『福沢諭吉教育論集』岩波書店（1991）による）

【表５】江戸後期から明治中期の社会思想資料・辞書の「－化」の用例

年代	作者	書名	用例
1866	福沢諭吉	アメリカ独立宣言	(1)英国王、我諸州ニ人口ノ繁殖スルヲ妨ゲント欲シ、外人帰化ノ法ヲ廃シテ其移住ヲ禁ジ、土地分配ノ新法ヲ立タリ。
1870	西周	復某氏書	用例ナシ
1870	福沢諭吉	学校の説	(2)方今の有様にては、読書家も少なく翻訳書もはなはだ乏しければ、国内一般に風化を及ぼすは、三、五年の事業にあらず、ただ人力をつくして時を待つのみ。
1870	福沢諭吉	肉食之説	用例ナシ
1871	西周	性法略	(3)事実成ルマレキ┐ノミナラス法律并ニ教化ノ道二反セル者ハ道理ナキ┐二属ス可シ
1872	福沢諭吉	学問のすすめ	(4)このほか造化の妙工を計れば枚挙に遑あらず。(5)上の徳化は南風の薫ずるがごとく、民のこれに従うは草の靡くがごとく (6)されども今の世間の開化者流にはこの少年の輩はなはだ少なからず。(7)今日に至りては全国人民の大半を教化したり。
1872	福沢諭吉	京都学校の記	(8)概してこれをいえば、文明開化の名を実にし、わが日本国をして九鼎大呂より重からしめんには、この子女に依頼せずして他に求むべきの道あらざるなり。
1873	西周	生性発蘊	(9)天地造化(10)人間開化総論(11)人間ノ交際并ニ體義ニ進ミ、風化ヲ開クノ一術一器トシテ理會ニ缺ク可ラサルノ屬具ナリ (12)蓋シ植物ノ性、漸次ニ開発組織シ、僧非垤斯即チ植虫類ニ至ル、是レ植化シ動發スルノ始メトス (13)植物ノ生活ニ、必要ナル物質ノ和合、解散ノ運化、陸續トシテ其中ニ行ハル、理、未タ明亮ナラサルカ上ヘニ、引類化同ノ法
1874	西周	致知啓蒙	(14)此分拆法ヲ、用ヒナハ、黄（コ）金ト銀トノ相混ハレルニ、硝酸ヲ灌キテ、銀ハ硝酸銀－化シ、黄金ノミ残レルヲ、サレハ、致知学ニテハ、分解ト、総合トノ二法ニ従ヒ (15)学開化而口唱文明之徒能摸其浩大而遺其精徽
1874	西周	百一新論	(16)又易ニ聖人神道ヲ以テ教ヲ設クトアリテ神道トハ如何ナル物カ確ト承知イタサネド、観化ノ象ニ取リテ言）レタ辞ナレバ、其教ヲ設クト云フモ今イフ教ノ意ニ協フテゴザルガ
1875	西周	心理学	(17)現実ニ起ルコトアリ、即熟睡ノ時、磁化ノ時、又埃垤爾… (18)ソレ造化ノ工ハ、其状、千緒萬端 (19)其初発ノ點ニ復帰ス、故ニ吾人、皆始マル處ニ終リテ、生涯ハ、猶幻化ノ環ノ如シ
1876	福沢諭吉	学者安心論	(20)今の西洋諸国は果して至文至明の徳化にあまねくして、その人民は皇々如として王者の民の如くなるか。
1877	西周	利学	(21)解－剖生－理造－化－史諸学、皆極其精微シ、而テ至無形／間マ下有リ人、能タニ達スル此ノ本 ・ 源之理二上者、漸タニ□－正レテ人－間、之品 ・ 一行ヲ、以テ下至ヲ風 ・ 化 (22)教 ・ 育以ニ奏レ感化ノ之功、而申スルニニ以テレテ外 ・ 部之権 ・ 力而ヲ今ヲ若キレ丙為ルル上 ・ 帝レ所好ハ、莫タニ過ルハ於 ・ 斯ノ民ノ之福 ・ 祉ニニ而ヲ造 ・ 化ノ之目 ・ 的、真レ在トニ於甲斯ニ乎 (23)人－生又タレ如タ此ノニ理 ・ 會スルノ自ニ己ヲ之業ニ随ヲ世 ・ 化漸ノニ進ムミ、而テ下至ル人視〝以テヲ為スニ当 ・ 上然ト (24)第－一－元ナルニ者ニ以テニ立テ彝－倫ノ之ニ学ッ、リ誘－化スル人－々ノ之心－上術ヲ、而モ下観レハ人－々ノ意見發スル (25)蓋レ其ノニ為ルル禍-殃ス将セレ不ラシト止ッ於妨開 ・ 化ニ抑ニ德－行
1878	西周	心理学	(26)或ハ遠ク働キ、造々化々ノ変化ヲ生セシムル是人ノ肯セサル可ラサル所タリ、故ニ、吾人ノ論辨ノ運用、多分皆此類ナリ、是ヲ以テ、此ノ如キ論辨ヲ、完ク詳細ニ説述スル時ハ、必ス演題ノ中ノ一體ト、錯化スルナリ (27)尋常、致知学ノ諸體ニ、缺ク可ラサル者ナリト、考ヘタル事、命題、演題ノ様式又演題ノ諸圖ヲ、第一圖ニ転化スル事ノ如キハ、余上ノ、網領内ヨリ、除キタリ…又転化法ハ、演題ノ圖ノ何如タルモ、之ヲ転化スルハ
1878	西周	仏国収税法	(28)諸国開化ノ初メニ於テ取用シタルハ自然ノ道理ナリ
1883	福沢諭吉	学問の独立	(29)その念仏を禁ずるの際に、法華宗に教化せんとするの意味は十分に見るべきが如し。
1884	井上哲次郎	改訂増補哲学字彙	(30)Assimilation同化 (31)Becoming転化、按、淮南原道、化推移得一之道以少生多 (32)Civilization開化 (33)Change変更、萬化按、陰符経、宇宙在乎身、又荘子大宗師、若人之形者、万化而未始有極也 (34)Differentiation分化（生） (35)Dissolution溶化（生） (36)Evolution化醇、按、易繫辞、天地絪縕、万物化醇、疏万物変化而精醇也、又醇化之字出進化開進 (37)Influence感化 (38)Naturalization帰化（法） (39)Nature造化 (40)Variety変化

1884	岩川友太郎	生物学語彙	(41)Assimilation同化作用（42)Carbonnte of lime炭化石炭（43)Differentiation分化（44)Dissolution溶化（45)Evolution醇化、進化（46)Incubation孵化スル（47)Morpliological differentiation体形分化（48)Phylogenesis有機体化醇論（49)Physiological diffcrontiation体用分化（50)Specialization選精進化（51)Specialization of Function選化作用（52)Varintion漸化
1886	福沢諭吉	慶応義塾学生諸氏に告ぐ	(53)その卵を孵化してまた卵を生じ、ついに養蚕の目的たる糸を見ざるに等しきの奇観を呈することあるべし。
1886	福沢諭吉	成学即身実業の説、学生諸氏に告ぐ	(54)政府は外国と条約を結び、貿易の道も開らけて、世間の風景、何となく文明開化の春をもよおし
1888	福沢諭吉	日本男子論	(55)世界開闢の歴史を見るに、初めは独化の一人ありて、後に男女夫婦を生じたりという。
1893	福沢諭吉	人生の楽事	(56)造化の祕密、誠に祕密なるが如くなれども
1899	福沢諭吉	女大学評論	(57)却て造化の原則を知らず時勢の変遷を知らざるは、古学者流の通弊にこそあれ。
1899	福沢諭吉	新女大学	(58)其これを与うるの間に母徳無形の感化力は有形物に優ること百千倍なるを忘る可らず。

（『改訂増補哲学字彙』の（生）は「生物学」、（法）は「法理学」の意味である）

5.1　造語要素「－化」

1884年『改訂増補　哲学字彙』（以下『哲』）と『生物学語彙』（以下『生』）の訳語において、「－化」は次の原語と対応する。「 - tion」を含まないもの＝（A)、「 - tion」を含むもの＝（B)、「-ization」を含むもの＝（C)、とする。

（A）Becoming転化（哲)、Change萬化、Influence感化（哲)、Nature造化（哲)、Variety変化（哲)、Change変化（哲）

（B）Assimilation同化（哲)、同化作用（生)、Dissolution溶化（哲）（生)、Evolution醇化、進化（生)、Incubation孵化スル（生)、Varintion漸化（生)、Differentiation分化（哲）（生）

（C）Civilization開化（哲)、Specialization選精進化、Naturalization帰化（哲）

（B）（C）は名詞を作る接尾辞「-tion」を伴うため、「－化」が名詞の造語要素と認識されていたことが分かる。また、（C）では、「-ization」が含まれ、「－化」が訳語要素として体系的に使われたことが言えるだろう。

以上のことから、「－化」は明治期に名詞の造語要素として使われ、二字漢語の後部要素として存在していたと考えられる。ただし、まだ江戸中期と同じ、二字漢字熟語の後部要素という形の制限があったため、前接部は一字漢字に留まった。

5.2 「□化」語順の安定

「Evolution」の訳語は1881年『哲学字彙』と1884年『改訂増補　哲学字彙』（【表５】(36)）に「化醇、進化、開進」と収録され、1884年『生物学語彙』では【表５】例（45）のように「醇化、進化」として、掲載された。【表５】例（36）において、「化醇」の出典が中国の古典語によるとある。実は中国の古典語では、「化醇」（下記例（4））と「醇化」（下記例（5））がともにある。

（4）天地絪縕、萬物化醇。（易、繫辭下）

（5）天地者、神明之所レ根也、醇二化四時一、陶二埏無形一。（鶡冠子、泰鴻）

古典語「化醇」（変化し、精醇な状態になる）と「醇化」（手厚く教え感化すること）の意味を比べてみると、「化醇」が「Evolution」の訳語として意味が近い。このため1881年『哲学字彙』と1884年『改訂増補　哲学字彙』は「化醇」を「Evolution」の訳語として登録したと思われる。『生物学語彙』は「Evolution」の訳語を「醇化」に改訳した理由について、次のように考えられる。

二例の構造を比べると、「化醇」は「化＋変化後の結果」の構造に対し、「醇化」は「修飾成分＋化」の構造である。また、江戸後期から明治中期までの訳本に「□化」字順の例が多く見られる。『生物学語彙』の「醇化」は「化醇」の意味を持ちながら、「変化後の結果＋化」の構造に変えたと考えられる。

以上「化醇」から「醇化」への訳語変化はつまり「□化」の字順が日本語で安定したと言えるだろう。また、辞書には、訳語の出典を記したものはほかに「転化」（【表５】例（31））、「萬化」（【表５】例（33））がある。このことも「化」が二字漢字熟語の後部要素に偏よったことを示し、意味的には接尾辞化していた証拠と考えられる。

5.3　古典語の意味変化

明治期にも古典語の意味変化がある。例えば「帰化」（【表５】の例（1））、「開化」（【表５】の例（15））があげられる。「帰化」「開化」は古典語で以下の例がある。

（6）a比縣流人、帰レ化徙レ居二万余戸。（後漢書、童恢傳）（『大漢和辞典』より）

b高麗より転じて、聖境に帰化せり（続紀・天平宝字二・六・二五）

（7）a仲哀死，以開化曾孫女神功為王。（新唐書、列傳 凡一百五十巻／巻二百二十　列傳第一百四十五／東夷／日本）

b一切如来初発心　皆是文殊所開化（某写経願文「大和西大寺蔵騎獅子文殊菩薩像胎内経」）

これらの例は従来中国の古典語において「教化に帰服する。王化に帰附する」（帰化）、「人を教えて、道理をわからせ悪から善にみちびくこと」（開化）の意味だが、明治期の啓蒙書において、新しい意味「本人の希望により、新しく他国の国籍を取得すること」（帰化）、「知識や文化が開け進むこと」（開化）になった。

5.4　物事の構成成分の性質

明治期「開化」（【表５】例（28））「同化」（【表５】例（30））のような用例が出現した。これらの例が表す意味、属性について検討する。

「開化」は国の成り立たせている構成要素のひとつとしての「知識・文化」が「開け進む」ようになるという意味である。また「同化」は、人の構成要素の一部である「思想や習慣」が同じくなるという意味である。

このように、明治期の「□化」がモノの物理的な性質・状態の変化ではなく、モノを構成する要素

―知識、文化、思想、習慣―が変わることを表すようになった。これを物事の構成成分の性質と呼ぶことにする。

6　明治中期から大正期の「－化」―新聞見出し・新聞記事・雑誌を中心に―

明治中期から大正期まで、「－化」の用法を考察するため、『朝日新聞』の見出しを中心に、用例を集めた。調査対象は以下のとおりである。

・『朝日新聞』（聞蔵Ⅱビジュアルによる）

・『中外商業新報』『東京二六新聞』『東京時事新報』『大阪時事新報』『時事新報』『東京二六新聞』『神戸新聞』『神戸又新日報』『福岡日日新聞』『大阪毎日新聞』

（神戸大学附属図書館デジタル版新聞記事文庫による）

・『女学雑誌』（森銑三（1969）『明治東京逸聞史』平凡社による）

・『太陽コーパス』（『国立国語研究所資料集15』（2005）博文館新社刊による）

【表６】明治中期から大正期：新聞見出し・新聞記事・雑誌の「－化」の用例

年代	漢字一字＋化	漢字二字＋化	漢語句＋化	地域名（カタカナ語・省略形）＋化	カタカナ語（名詞）＋化	和語（名詞）+化
1874	欧化（雑誌）					
1885 太陽	感化 造化 教化 溶化 融化 風化 酸化 硫化 軟化 硬化 羽化 蛹化 脱化 孵化 帰化 開化 退化 進化 同化 轉化 法化 紅化 現化 漠化 混化 叫化 霊化 淳化（醇化）	理想化 東洋化		内地化 日本化 支那化		
1890	帰化					
1897		西洋化		欧米化 露国化		
1898	悪化 退化					
1899	孵化	進歩化（進歩－進歩党を指す）				
1900	匪化			印度化		
1901 太陽	神化 徳化 分化 液化 炭化 美化 眞化 薫化 訓化 鹸化 鋼化 人化 垂化 善化 相化 俗化 脱化 桑化	平凡化 個人化 工藝化 国民化 江戸化		露化 東京化 英國化 獨逸化 露西亞化		
1903	道化	和人化				
1904				関西化 （女子雑誌）		
1906	遷化					
1909	風化 造化 巡化			米化 英化	シヤモ化	
1909 太陽	詩化 浴化 類化	空想化 具体化 芸術化 上流化 性格化 平民化 滑稽化 具體化 政治化 哲學化 天來化 電氣化 表象化 明日化 唯進化 劣等化 屬僚化		佛國化 京都化 米國化 北米化 日化 アメリカ化	ヨボ化	
1910	同化	趣味化				
1911		国際化 一転化 急転化 戦場化 興行化 世界語化　好感化				
1912	電化 洋化（大阪毎日新聞）	石灰化 悪感化 良感化 美人化 都会化（大阪毎日新聞） 併合化（大阪朝日新聞）		蒙化		絵葉書化
1913	冷化 衰化	純臭化	利権争奪場化 塩専売化 （神戸又新日報）			
1914		弥次化		欧州化	ボンチ化	
1915	皇化 転化	現代化 新聞化				
1916	凡化	資金化				
1917		民主化 軍閥化 穏健化 政党化				
1917 太陽	浄化 鈍化 簡化 醜化 深化 陶化 能化 遊化	茶道化 事実化 商業化 神話化 店員化 奴隷化 流動化 韻文化 客觀化 具象化 愚劣化 形式化 結晶化 元祖化 骨董化 罪悪化 事實化 象徴化 深高化 神聖化 通俗化 模様化 溶液化 單一化 單純化 圓熟化 装飾化 證券化 男性化		羅甸化 希臘化 佛蘭西化 土耳其化 日耳曼化		
1918	俗化 鉱化	泰西化 社会主義化				

1919	濃化	過激化 共産化 穏和化 官僚化 民衆化 危険化 民本化 匪賊化 社会党化	市場社会主義化 公債民化			おもちや化 浮世絵化
1920	革化 赤化	沙漠化 白熱化 教室化 赤色化 暴動化 暴行化 右党化 学者化 労農化 凶暴化 中性化	軍国主義化 危険思想化 独逸社会化 政治問題化			
1921	藍化	重大化 内乱化 地方化 社会化 一般化 暴徒化 荘厳化 映画化 普選化 史劇化 公民化 資本化 予備校化　動物園化	労農資本化 小地主化 債務公債化			
1922	蝋化	苛性化 議会化 市民化 平和化 同盟化 高級化 応用化 遊戯化 家庭化 簿記化 朝日化			瓦斯化 ソヴィ エット化	
1923	零化 熱化	文化化 新式化 証券化 動力化 永久化 深刻化 組織化 細物化 太物化 電熱化 会員化 立体化 小説化 正金化	米陸軍化			
1924	軍化		遊資生産化			
1925	好化 良化	法律化 普遍化 長期化 簡易化 有利化 予備化 科学化 確実化 複雑化 機械化 人間化 革命化 実際化　補助艦化	争議罷業化			
1925 太陽	赤化 電化 悪化	合理化 異性化 映畫化 液状化 液體化 家畜化 感情化 企業化 戯曲化 近代化 愚像化 現實化 工業化 工場化 高尚化 高率化 山林化 産業化 私娼化 紙幣化 灼熱化 熟語化 娼婦化 小使化 職業化 生活化 精神化 賭博化 標準化 複雑化 文章化 便利化 暴力化 露骨化 論理化 國民化 國有化 實用化 穩健化 女性化	階級的化 資本主義化 西洋料理化 無意識化 東洋英雄化 水性瓦斯化 理想到達手段化 組合資金流動化	北京化 スペイン化	イオン化 カルケチ ユア化 デモクラ シー化	
1926	緑化	舞台化 可能化 経済化 倫理化 鉱石化 政争化 投機化 食糧化				

以上の例について、出典を示されない例は『朝日新聞』から採集したものである。また年代の後に「太陽」と書いてある行の例は雑誌『太陽』の例を表す。

6.1　造語の意味変化

本論文の調査範囲で、1895年以降、日本で作られた造語に意味変化が生じたことが分かる。例えば「軟化」は元々「事物の物理的性質・形状」の変化を表したが、下記（8）「漢人を軟化」の「軟化」は「態度や姿勢が強硬からやわらげられて穏やかになること」を言う。人の態度など抽象的な意味を表すようになった。類例は「硬化」「進化」「退化」がある。

（8）一時漢人を軟化し。制御し易きの利益はあれども（略）

（『太陽』1895年４月「支那衰弱の理由」川田甕江）

6.2　前接部の拡大

明治中期から大正期まで、「－化」の前接部分は次のような拡大が見られる。

1885年「二字漢字＋化」（理想化、東洋化など）の用例が出現した。「－化」が二字漢字の後部要素という形の縛りから解放された。

1901年「－化」の前接部が三字漢字に拡大した。その例は「露西亞化」である。これまでの用法は「露化」または「露国化」であったが、「露西亜化」の出現は、つまり「－化」の前接部が一字漢字、二字漢字から解放したことを意味する。

1909年非漢字表記の「カタカナ語＋化」の用法（アメリカ化、シヤ(ママ)モ化）が出現した。これまでの「カタカナ語＋化」が「露西亞化」「印度化」のように、漢字表記であった。「－化」前接部の語種が

漢字形式から解放し、カタカナへと拡大した。

1912年前接部が和語名詞に拡大した(絵葉書化)。ただし漢字表記であった。このことの意味は、「－化」前接部の語種が和語へと拡大した。これで、「－化」の前接部が漢語、外来語、和語、全部を受けるようになった。

1913年から前接部が漢語句に拡大した（利権争奪場化)。「漢語句＋化」について詳しくは別稿に譲るが、要約しておくと、次のとおりである。等位関係の[[ＣＤ]・[ビデオ]]化、並列関係の[[高級]・[多様]]化、累加関係の[[晩婚]・[非婚]]化、因果関係の[[少子][高齢]]化、などが挙げられる。また前接部は類義語の列挙であるもの[[移動]・[流動]]化がある。

1913年「混成語＋化」の例「塩専売（和語＋漢語）化」が出現した。「－化」の前接部は単一語種でなくなったことを意味する。

1919年以降、前接部が和語名詞の平仮名表記のものに拡大した。その例は「おもち(ママ)や化」である。このことの意味は、「－化」の前接部が漢字、カタカナ以外、平仮名表記にも使えるようになった。

1922年連体修飾成分が「－化」の前に付くようになった。例えば[[完全][瓦斯化]]、1923年 [[完全][浄化]]が挙げられる。

6.3 「物事の構成成分の性質」と「人の態度・特徴」

① 構成成分の性質・状態

1885年、「地域名＋化」（日本化、支那化等）の用法が出現した。以下は例（9）例（10）を用いて「地域名＋化」の意味を検討する。

（9）水戸の<u>東京化</u>　紺暖廉(コンノレン)の店頭(ミセサキ)は総ガラスと化(クワ)し行燈(アンドリ)は洋燈(ランプ)に洋燈(ランプ)は電燈(デンコウ)に早変(ハヤガハ)りして

（『朝日新聞』1909年８月20日　朝刊　４頁　東京）

（10）移住外國人並に其子女に英語を教へ、之を以て外國人を<u>アメリカ化</u>する最有力の手段となせり。

（『太陽』1909年６月「アメリカと日本」上田貞次郎 論説）

例（9）の「東京化」は「水戸が東京になる」のではなく、水戸従来の「紺暖廉の店頭」が「東京のように（ガラス、電燈）なる」という意味である。例（10）の「アメリカ化」は「アメリカの習慣文化、生活様式に同化される」ということを言う。このように、「地域名＋化」の用法は江戸後期～明治中期、洋学の訳語の意味と同じ、モノの内部構成の仕方や構成成分の性質の変化を表す。言い換えれば、「地域名＋化」の用法は洋学の「□化」の意味の延長と理解できる。

②　人の態度・特徴

1917年、人の典型的な態度・特徴を表す例「男性化」が出現した。

（11）然るに論者或いは斯る思潮に放任する時は女子は男性化して情味を失ひ、動もすれば結婚を嫌ふ様になつて、　　（『太陽』1917年８月「日本の貴婦人は何を為しつゝありや」）

この例は「女性が男性になる」ということではなく、女性が持っているいくつかの特徴があるとして、その中の一つまたはいくつかが「男性のようになる」ということである。このタイプの例はこれまでの例と違い、人の典型的な特徴、性格の面の変化を表す。類例は1920年の「中性化」が挙げられる。

7　昭和期以降の「－化」－新聞記事を中心に―

昭和期以降の「－化」の用法は『朝日新聞』を中心に用例を網羅したものである。

【表７】昭和期以降の「－化」の用例

年代	漢字一字+化	漢字一字以上＋化	漢語句＋化	地域名＋化	カタカナ語＋化
1927	純化 水化	実業化 憲政化 公園化 厳重化 困難化 現物化 暴動化 簡便化 重大化 正義化 漫画化 採算化 近代化 不定期化	無産階級化 教育地方化 満蒙産業化 個人主義化		
1928	激化 紙化	法制化 暗黒化 左翼化 教育化 積極化 実用化 左傾化 国民党化	救済銀行化 検束問題重大化 議席問題重大化 産業合理化		モダン化 ディーゼル化
1929		簡単化 知能化 楽園化 大口化 強力化 大型化 性欲化 順調化 職業化 民営化 右翼化 複雑化 有力化 警察化 平準化 反動化 空間化 真剣化 紛争化 白骨化 全国化 国有化 不穏化 騒擾化 極右化	医療社会化 重大問題化 補修教育化 国際問題化 極右反動化 大脅威化 小ブルジョア化		デエゼル化
1930	応化	標準化 表面化 消極化 徹底化 大衆化 制度化 尖鋭化 説明化 卑俗化 事務化 営利化 芸術品 運動化 酷熱化 均等化 人文化 美田化 熟畑化 営業化 劇場化 自動化 わい曲化	工業地化		トラスト化 スピード化 ファシスト化
1931	党化 深化	技芸化 独占化 図案化 無電化 拡大化 集団化 均衡化 能率化 現金化 坊主化 工業化 平均化 一元化 王道化 組合化 信託化 多角化 立憲化 狭小化 好況化	対華借款化 事態険化 工業国化 戦闘行為化 大工業化 無意義化 泥試合化		テロ化 カーキー化 ジャズ化 ドル化 ファッショ化
1932	赤化 良化 軟化 株式 軟化 強化 美化 液化 濃化	合理化 米国化 重大化 簡易化 大衆化 企業化 険悪化 土賊化 普遍化 暗黒化 大衆化 平等化 空文化 尖鋭化 土賊化 機械化 良好化 現金化 商品化 反乱軍化す 資金化 金融化 清新化 同鞘化 修羅場化 表面化 専売化 新鮮化 極力化 普遍化 一般化 猛烈化 投機化 組織化 有効化 近代化 固定化す 流動化 政党化 飼料化 縮小化 立体化 擾乱化 有望化 領土化 暴力化 強盗化 穏健化 猛烈化 合法化	再映画化 定期契約化　郵便貯金化 経済一単位化 航空国際化 一敵国化 不動産資金化	ドイツ化	テロ化 ファッショ化
1933	浄化 硬化 激化 濃化 進化論 悪化 深化 転化 再浄化 市政浄化 不安深化 電化 劇化	具体化 険悪化 定期化 中立化 暴動化 単一化 問題化 簡単化 映画化 徹底化 不良化 共産化 奔流化 優秀化 独裁化 本格化 深刻化 予算化 堅実化 常識化 積極化 暗黒化 高級化 資金化 歌劇化 白骨化 種繭化 条約化 灰色化 類型化 高度化 恒久化 能率化 多角化 重大化 濃度化 小口化 国有化 緊密化 機械化 酒精化 社会化 一般化 立法化 倒壊化 楽譜化 社債化 濃厚化	植民地化	ヨーロッパ化	レビュー化 モダン化 ブル化 ナチス化
1934	俗化 同化 好化	工業化 慢性化 田園化 図案化 強力化 正常化 大戦化 短期化 一元化 実用化 国粋化 武装化 濃厚化 緩漫化 確定化 暴力団化 共同化 恒久化 講談化 舞踊化 高級化 家庭化 演芸化 通俗化 実際化 常態化 個別化 鋼鉄化 窮屈化 証拠化 国産化 問題化 属領化 堅実化 憲兵化 常態化 猛悪化 工業化 法律化 寄席化 私娼化 国策化 平時化 法制化	長期短期化 二位一体化「欧州連盟」化 反政府化	米国化 アジア化	ナチス化 カルテル化 トーキー化 スピード化 ロボット化 レヴュー化

1935	急軟化 弱化 毒化 皇化 量化 醇化	穏健化 迅速化 浪曲化 組合化 軍用化 単一化 恒久化 科学化 平穏化 管絃楽化 職業化 孤立化 多面化 官僚化 会社化 専門化 有望化 明朗化 武装化 作業化 法令化 軍隊化 明朗化 分散化 年度化 健実化 淑女化 傭兵化 商品化 抗争化 重油化 立法化 緊密化 武装化 白熱化 明朗化 農村化 窮乏化 死物化 微温化 具現化 職業化 海軍化 定期化 円滑化 一率化 明朗化 不穏化 事業化 統一化 不良化	一貫作業化 機能高度化	独逸化	ジャズ化 スピード化
1936	普化	平均化 安定化 堅実化 実用化 軍事化 緊迫化 平穏化 資金化 徹底化 洋装化 険悪化 確実化 属領化 独立化 国産化 綜合化 左翼化 潤沢化 均衡化 圧制化 普通化 叛乱化 同等化 立体化 施設化 緊密化 均等化 地方化 普遍化 強力化 恒久化 平明化 稀薄化 文書化 中央化 混沌化 公平化 真剣化 露骨化 予算化 社債化 極左化 強靭化 堅実化 洋画化 有望化 綜合化 普遍化 立体化 輿論化 健全化 芸術化 緊密化 統制化 古代化 平静化 多角化 窮乏化 高級化 形骸化	保護領化 付属国化 共済施設化 工業地方化 財政健全化 ３国会議化 ３倍化		ブロック化 スピード化 レヴュー化 ハイ・ドラフト化
1937	鈍化	集中化 規格化 政治化 孤立化 熾烈化 浪曲化 美術化 平年化 中立化 担保化 図案化 反動化 市街化 融通化 常態化 真剣化 煩雑化 簡捷化 人道化 緊迫化 熾烈化 露骨化 急迫化 常識化 万全化 体制化 平静化 高度化 中立化 褐色化 均一化 要塞化 公式化 明朗化 小説化 秘密化 堅実化 無力化 敏捷化	国家集中化 国際放送化 近代市街化 国政常態化 関係煩雑化		ラジオ化 スポーツ化 トーチカ化 フラン・ノミナル化
1938	鈍化 劇化 不安濃化	兵役化 蒼白化 熱濃化 普及化 速度化 物語化 属国化 世界化 法人化 錯雑化 画一化 便衣化 親密化 本格化 浪曲化 杞憂化 共匪化 親独化 軍事化 要塞化 孤立化 悪質化 武装化 焦土化 具体化 濃厚化 敏活化 産組化 舞踊化 右翼化 親日化 細分化 採算化 尖鋭化 木炭化 色彩化 緑地化 焦土化 窮屈化	大河港化 急速度化 正式種目化 経営粗放化 四川中央化 武穴孤島化 企図微温化 料金低廉化		ナチス化 スターリン化 ボルシエヴイキ化 “クリーク”化
1939	美化 純化 濃化 分化 俗化 弱化 逆化	紛糾化す 無力化 困難化 洋画化 健全化 武装化 新鋭化 緊密化 赤色化 潤沢化　舞踊化　輿論化 冷却化 国防色化 金属化 緊密化 明朗化 組織化 色彩化 単一化 絶望化 全体化 保護化 国民化 平準化 閑散化 慢性化 有力化 濃厚化 熾烈化 清浄化 明朗化 栄養化 集約化 有力化す 恒久化 自由港化 巧妙化 法令化 尖鋭化 脆弱化 水田化 簡捷化 映画劇化 現金化 集中化 本格化す 平準化 植民地化 細分化 徹底化せ 定説化 多角化 均衡化 貧困化 白熱化 希薄化 単純化 拡大化 熾烈化 明瞭化 中立化 洋画化 緊密化 弱体化 平常化 中央化 問題化 活溌化 全国化	地方普遍化 関係緊密化 原因明白化 成績均等化 工場地帯化 地方工業化 供給窮屈化 規格単純化 印度自治領化「薄氷」問題化	ソ連化 芬ソヴエト化	トーキー化 ナチ化
1940	醇化 純化す	健全化 有力化 緊迫化 簡捷化 独裁化 高級化 真剣化 要塞化 稀薄化 政争化 公園化 蛋白質化 手数料化 職業化 全面化 綜合化 衛生化 社会化 緊密化 歪曲化 不良化 禍根化 緊急化す 自給化 単純化 企業化 下請化 無力化 類型化 米粉化 傀儡化 低調化 「戦争党」化 組織化 属領化 積極化 国粋化 濃厚化　微妙化 要塞化 慎重化 精動化 協同化 繁忙化 平静化 集中化 露骨化 同調化	統制経済綜合化 西南支独占化 国交調整条約化 事態緊迫化 戦時体制化 大戦世界化 参戦情勢緊迫化 補給線脆弱化 事態重大化 経営合理化 連絡容易化 国共相剋激化 政府緊密化 気運表面化 手続簡易化 全体主義化 身分法令化 ラングーン上海化 日英関係困難化 保護領化 重点主義徹底化 手続簡易化 市場狭隘化 人工連賃織化 配給不良慢性化 新体制完璧化 浮動購買力化 戦時体制化 第２の西班牙化	西班牙化	ドラマ化
1942		単純化	仏の枢軸接近積極化 行政簡素化 提出書類簡略化 役割積極化 行政簡素化		
1943		戦力化 要塞化 魔窟化 普遍化 簡捷化 皇民化	極力効率化 配給円滑化「草炭」工業化 徹底合理化 航空決戦本格化 事務簡捷化 自主経済化 事務簡素化 奇襲兵器化 立体戦凄烈化 反攻本格化 東亜隷属化		
1944		簡素化 住宅化	国家資本一体化 大宮島基地化 内外地一体化 統治行政緊密化		
1945	明化	植民化	資本と経営綜合化 経済民主化 企業民主化 学校民主化 皇宮警察民主化 犯罪兇暴化		
1946			非武装化		
1947		商店化	都市不燃化 貿易正常化		
1949		国有化			

1950		円滑化 活発化 暴力化 戦時化	騒乱波状化す 戦乱局地化		
1951		細分化	北海道基地化 中小造船救済問題化 非合法化 経営健全化 演説問題化		
1952			新政策具体化		
1953		集中化 百貨店化	影響深刻化 算定方式単純化 国境正常化 方針明確化		
1954		中立化 容易化 困難化 重点化	外交関係正常化 立法具体化 貿易自由化 空襲活発化 選挙公明化 闘争長期化		
1955		健全化	合併具体化 漢字簡略化 軍事基地化		オートメーション化
1956		人気化			キプロス化
1957		社会化	国交正常化 非核武装化		
1958		不良化 右傾化	民公社化 自由市化 為替自由化		
1959	金化･銀化	平和化 弱体化 舞台化	国会正常化 国土美化		
1960		系列化 定員化 洋風化	政治問題化 銀行国有化 選挙公明化 農村組織化 用語平易化		オートメ化
1961		中国化	二つの中国化 総合機械化 沖縄基地恒久化 非スターリン化	イラク化	
1962		集約化			
1964			農政近代化 全国ネット化 財政硬直化		マンモス化 ハリネズミ化
1965		潜行化 核禁化 投機化 非行化 企業化 系列化 米国化	戦時経済化 口語体化 原潜基地化 アジア工業化		
1966		革命化 流動化 公営化 適正化 孤立化 官僚化 実戦化		ベトナム化	マンモス化
1967					TV化
1967		高層化 宅地化 広域化 単純化 砂漠化 柔軟化 巧妙化	ビル高層化 条約草案化		ネオナチ化
1968		無害化 無人化 多極化 定員化 分極化 同質化	炭鉱国有化 高層ビル化 差別自由化 大幅自由化 非合法化 凶悪・大型化 輸出商品高級化 軽量・小型化 一部自由化 ワク弾力化 資料カード化		
1969		省力化 均一化 専門化 舞台化 広域化	住宅量産化 小型・多発化 完全無償化 特殊法人化 関係緊密化		トランジスタ化 JIS化 IC化
1974			「動く基地」化		
1975		敏速化 零細化 連邦化 旧式化 指数化 急進化 あいまい化 飼料化 反米化 市街化 電算化 母港化 駐車場化	国内民主化 大幅合理化 夫婦平等化 農村近代化 経営多角化 中小企業化 財政窮乏化 自然公園化 供給安定化 海水淡水化		コンビナート化 オペラ化
1980		老齢化 移動式化 母性化 保守化	「国家補償」明確化 凶暴・集団化 老齢化・ミニ化 「第二の郵貯」化		
1984			「指示まち」化「時なし野菜」化「ゴミ箱会社」化		CD－ROM化
1985	緑化	数字化 砂漠化 宅地化 洋風化 円滑化 事業化 情報化 歳出化 虚構化 家畜化 活性化 地下鉄化	策動活発化 機械化栽培 政治問題化 常時営業化 通信衛星事業化 通信自由化 高度情報化社会 新与党化税制簡素化 分割・民営化 政治問題化大衆社会化 政局流動化 高度情報化 経営効率化 戦争中神格化 開発・商品化「死の商人」化 「自立の中堅企業」化「動くオフィス」化		イベント化 ソフト化
1986		朝食化	「ボタン一押し」化「新都市拠点整備事業」化		
1987			「なつかしのメロディー」化「張り子のトラ」化 「切れ目なし」化		
1988			地球温室化		
1989			「読む漫画」化「普通の人」化「過去の人」化 「政治の世襲」化「完全オープン」化（23） 「完全週休２日制」化		
1990		川柳化 がん化 温暖化 不燃化 ひとり化	地球温暖化 減容・資源化 悪質・巧妙化 普通名詞化 「都会のゴミ捨て場」化「飢餓難民」化 「自由興業地帯」化「島ぐるみ野外博物館」化 「国連信託統治下の共有経済特別区」化		チェーン化
1991			「走る情報空間」化「ルールなき市場」化 「少量多品種」化「経済ヤクザ」化「生活文化産業」化 「非核地域・中立国」化		
1992			「一発勝負」化「大学院重点大学」化「工場生産」化 「地域ニュース」化「青空駐車場」化		
1993			「香りのボーダーレス」化		
1994			「小さな学校」化「エコ（環境）オフィス」化 「眠らない街」化		
1995		宅地化 思想化 干陸化 淡水化 世界遺産化 脚本化 広域化 共学化	「家電製品」化 脱国境化 中小商業活性化 社会問題化 「学校の後援会」化		「バイバイ」化
2000	老化 漢化	明文化 公園化 必修化 過疎化 堆肥化 無害化 地下化 粉末化	男女共学化 少子化・人口高齢化 金融安定化 財政健全化 開放・自由化金融再生・健全化 医療費無料化 超高齢化 少子化 ごみ処理広域化 高度情報化 産廃銀座化 集中管理化 オール与党化		ルール化 デジタル化 モノレール化 ユニセックス化 光ディスク化 ネットワーク化 「ユニクロ」化 ミイラ化
2001			「風景の一部」化「新卒パート・派遣」化 「全村博物館」化		

2002			「子どもの墓地」化「戦争のできるふつうの国」化 「癒やしの公園」化「機会の不平等」化 「草の根運動」化「夜更かし」化		
2003		見える化	「裸の王様」化「おたくの部屋」化「駆け込み寺」化		
2004			「第２のアフガン」化「隠れ債務」化「使い捨て」化 「つかの間」化		
2005			「世界の工場」化「ホリエモン放送」化 「サッカー先進地」化「熱い戦争」化		
2006			「手軽で簡単」化		ドーナツ化
2007			「いい人」化「地域キャンパス校」化「上り専用」化 「持ち分法適用会社」化「ごみ屋敷」化		
2008			「バイオ燃料10％」化「売る自由」化「便利な場所」化 「一発受験」化		
2009			「陸の孤島」化「公然の事実」化「働く貧困層」化 「どこでもネット」化「シャッター通り」化 「ワンマン」化		
2010			「世界の公用語」化「普通の人」化「唯一の目的」化 「道の駅」化「受け身」化「救命救急センター」化		
2011			「みんなの会社」化		
2012			「切（き）れる」化「エネルギー生産都市」化		スマホ化

7.1　接頭辞の出現と分類

1929年、接頭辞が付くようになった。例えば［［大］［問題］］化、1930 年［［高］［速度］］化、1934年［［反］［政府］］化、1946 年［［非］［武装］］化、2000年［［超］［高齢］］化などがある。このように属性を表す接頭辞がほかに［［小］［規模］］化、［［低］［年齢］］化、などが挙げられる。また否定を表す接頭辞には、［［不］［安定］］化］がある。

1933年、接頭辞が連用修飾成分として付く用法が出現した。その例は［再］［浄化］である。類例は［急］［軟化］、［脱］［［過激］化］、［逆］［［温暖］化］、［反］［［グローバル］化］、などがある。これらの接頭辞は次のように分けられる。

頻度を表す：「再」　程度を表す：「超」　逆転を表す：「反」「逆」「脱」

接頭辞は二種類に分けられる。①ものの「属性を表す」接頭辞（例えば「大」「小」「高」「低」「準」）、否定を表す接頭辞（例えば「不」「非」）は変化の結果に含まれる。つまり接頭辞が「－化」の前接部になる。②頻度・程度・逆転を表す接頭辞は連体修飾の用法で「－化」全体を修飾する。

二種類の接頭辞の出現順位について、属性を表す接頭辞が先に出現し、「－化」の前接部を修飾する。頻度・程度・逆転を表す接頭辞が後で出現し、「－化」を包含し、連体修飾の用法として使われる。

7.2　前接部の拡大

1961年、引用＋「－化」の用法が出現した。「［二つの中国］化」が出現した。「－化」の前接部が句を包摂するようになった。「二つの中国」はそのままの引用であるため、意味が保持すると思われる。

1967年以降「アルファベット＋化」の例が出現した。その例は「日本の近代文学をTV化」である。類例は1969年「部品JIS化急ぐ」「カラーＴＶのIC化」1984年「CD－ROM化」が挙げられる。

1968年［［凶悪］・［大型］化、［［軽量］・［小型］］化のように、「－化」が並列関係である二つの形容動詞を同時に受けるようになった。

1974年「動く基地」化のように、比喩の意味で使われる前接部が見られるようになった。類例とし

ては「指示まち」化「時なし野菜」化「ゴミ箱会社」化などがある。

2003年以降、「和語動詞＋化」の例「見える化」が出現した。2012年の「切れる化」がある。

2012年「一億総スマホ化」のような用法がある。この用法については別稿に譲る。

８　まとめ

以上から、「－化」は二字漢字熟語の後部要素から接尾辞へ移行したが、その過程において上述のようなさまざまな段階がある。意味的変化、「化」の自立性、二字漢語熟語の後部かどうか、前接部の語種拡大、などがあったことが分かる。

江戸中期、蘭学者の訳本に、「－化」が造語要素として使われた。中国の古典語や中国の科学著書の影響を受けながら、日本語に合う語順で造語を行われた。造語のほか、古典語の意味変化も見られる。「－化」は意味的に接尾辞化が始まっていたと思われる。

明治初期から明治中期まで、「－化」が造語要素として体系的に使われた。しかし造語がまだ二字漢字熟語という制限から解除されていなかった。

明治中期の新聞記事に、「－化」が接尾辞として多く見られるようになった。とくに地域名＋化の用法が多く見られる。前接部がカタカナ語に拡大したあと、複合語＋化に拡大した。その後、和語前接部が出現した。「－化」が日本語全部の語種を付けるようになった。

明治の終わりごろから大正初期のあいだ、「－化」の前に修飾成分が付くようになった。二字漢字「完全」、属性を表す接頭辞「大」「小」など、「－化」全体を修飾する接頭辞「再」などが出現した。
昭和中期、「－化」の前接部が名詞句に拡大し、例えば「二つの中国化」「動く基地化」のようなものがある。しかし、前接部は引用や比喩に限られる。

平成になると、「－化」の前接部がさらに拡大し、和語動詞「見える化」や「一億総スマホ化」のような用法も見られるようになった。

「－化」が表す属性の変化について、江戸中期では物事の物理的な性質・状態変化を表す。例えば「酸化」「軟化」がある。明治前期になると、物事の構成成分の性質を表す用法が出現した。例えば「開化」がある。明治中期の新聞記事では物事の構成成分の性質を表すほか、人の態度・特徴も表すようになった。例えば「女性化」がある。昭和中期、比喩、つまり典型的な特徴を表す用法が出現した。

以上は漢語接尾辞「－化」の成立、展開について、通時的に考察した。初出例の時間について、変化する可能性があると思われるが、大きな流れは、以上のように結論できると考えられる。

参考文献

池上素子（2000）「「～化」について―学会抄録コーパスの分析から―」『日本語教育』106
池上素子（2003）「変化表現の共起関係―「～なる」「～する」「～化（する）」を対象に―」
『国語国文研究』123　北海道大学国語国文学会
影山太郎（2008）「属性叙述と語形成」『叙述類型論』くろしお出版
影山太郎（2007）「接尾辞「-化」, -ize, -ifyの属性叙述機能」『人文論究』57－2関西学院大学
木坂基（2002）「現代日本語文章における字音接辞の用法について」
『尾道大学芸術文化学部紀要』２
木村秀次（2006）「「風化」の語誌」『国際経営・文化研究』11
小林英樹（2004）「「化」について」『現代日本語の漢語動名詞の研究』ひつじ書房
国立国語研究所（1959）『明治初期の新聞の用語』国立国語研究所報告15　秀英出版
国立国語研究所（2005）『雑誌『太陽』による確立期現代語の研究:『太陽コーパス』研究論文集』
斎藤静（1967）「日本語に及ぼしたオランダ語の影響」『東北学院大学論集』47
杉本つとむ（1987）『解体新書の時代―江戸の翻訳文化をさぐる―』早稲田大学出版部
惣郷正明・飛田良文（1986）『明治のことば辞典』東京堂出版
蘇小楠（2006）「中国における日本製化学用語の受容―20世紀初期の中国資料を中心に―」
『名古屋大学国語国文学』94
田窪行則（1986）「－化」『日本語学』5-3　明治書院
野村雅昭（1978）「接辞性字音語基の性格」『電子計算機による国語研究Ⅸ』61国立国語研究所報告
橋本行洋（2010）「体系意識による新語の成立―「特化」を例として―」『国語語彙史の研究』29　和泉書院
服部四郎（1960）『言語学の方法』岩波書店
水野義道（1985）「接尾的要素［－性］［－化］の日中対照研究」『待兼山論叢（日本学）』19
水野義道（1987）「漢語系接辞の機能」『日本語学』6
宮地裕（1973）「現代漢語の語基について」『語文』31
森岡健二（1987）「文字の機能」『現代語研究シリーズ』明治書院
山下喜代（2003）「字音接尾辞「－化」について」『青山学院大学文学部紀要』44
飛田良文・遠藤好英など『日本語学研究事典』（2007）明治書院

本稿は日本語学会2012年度春季大会での研究発表（５月20日（日）、千葉大学　西千葉キャンパスＣ会場、「漢語接尾辞「－化」の史的変遷」）を改訂したものである。席上、有益なご指摘を下さった方々に感謝申し上げる。